サイクルツーリズムの社会的価値の評価分析
― しまなみ海道を対象として ―

徳島大学　学生会員　水田沙和
徳島大学大学院　正会員　尾野　薫
徳島大学大学院　正会員　山中英生

1. はじめに

環境への配慮，健康志向などの価値が結びついたエコツーリズムやヘルスツーリズム，スポーツツーリズムなどの新しい観光形態が拡大している．特に，自転車観光は近年，多くの自治体で取り組みが見られる [1)]．本研究ではこうしたサイクルツーリズムの先進地であるしまなみ海道を対象として，自転車旅行者の行動実態を把握し，しまなみ海道の社会的価値について社会的効果の評価を試みた．これによって，サイクルツーリズムの有益性を示すとともに，我が国のサイクルツーリズムの発展・充実に資する知見を得ることを目的とした．

2. 調査方法

また，しまなみ海道で行われている自転車観光促進に関する取り組みについて，担当者へのヒアリング調査を行い，自転車観光への取り組み内容や目標を把握した．この結果をもとに，しまなみ海道のサイクリストの実態を把握するためにWEBアンケート調査を実施した．楽天リサーチ社に依頼して，全国の登録者パネル10000人と広島・愛媛県への最近1年間旅行者パネル10000人から「最近の5年間でしまなみ海道を自転車で走行した人」をスクリーニングし，800 サンプルを収集した．分析ではユーザーレベル，自転車利用形態，訪問回数に着目し，1日に自転車で走行できる距離が15㎞未満を“ローユーザー”，15～30km未満を“ミドルユーザー”，30km以上を“ハイユーザー”と区分，自転車利用形態として“公共のレンタサイクル利用者”と“その他の自転車を利用”に区分，さらに5年間に1回のみ訪問した場合を新規訪問者，2回以上をリピーターとして，旅行者の実態，サイクリングで得られる効果や意識変化，満足度について比較分析・考察を行った．

3. 自転車観光促進の取り組み分析 ＜ヒアリング調査＞

全ての事業において幅広い関係者の協力の下，役割分担して取り組まれていることが確認できた．特に，これまで行政主体の事業が展開されてきたが，しまなみ海道の将来像である「サイクリストの聖地」となることを実現するための多様な取り組みが志向されており，官民連携によるDMO組織の設立や，NPO団体，民間企業などの担い手の協力，関与を促進する動きが見られた．多様な主体の連携でしまなみ海道の魅力や価値を確立する長期的・持続可能な事業推進が目指されていることが明らかになった．

4. 利用実態の分析結果 ＜WEBアンケート調査＞

ユーザーレベル別では長距離・長時間の走行に慣れているユーザーほど走行時間が長く，訪問回数が多い（図1，図2）．ただし地域での消費額はミドルユーザーが最も高く，ハイユーザーは下がる傾向が見られた（図3）．

一方，レンタサイクル利用者とその他自転車利用者では，レンタサイクル利用者の走行時間や消費額の比較から利用者はローユーザーに偏らず，多種のサイクリストによって利用されていることが考えられる(表1)．またその他自転車利用者はミドルユーザーやハイユーザーに近い傾向が見られ，マイ自転車を持ち込むサイクリストにミドルユーザーが増加していることが考えられる．

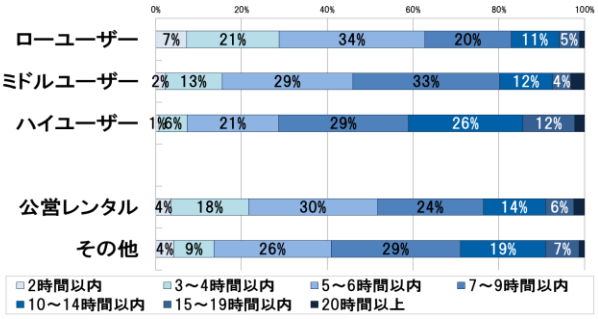

図1　サイクリング走行時間

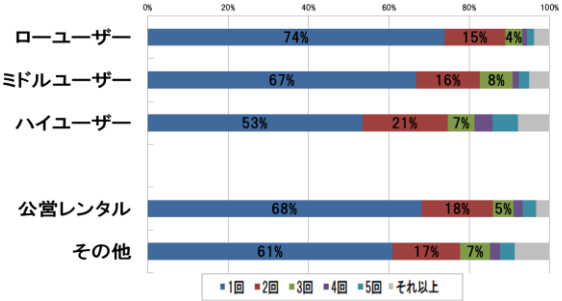

図2　訪問回数

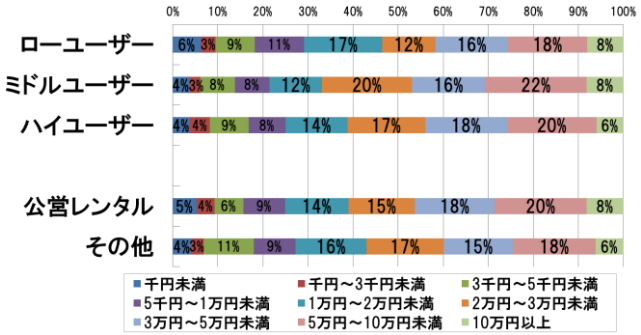

図 3 消費金額

表 1 ユーザーレベル別・レンタサイクル利用別の走行時間、訪問回数、消費額の平均値

	走行時間	訪問回数	消費額
ローユーザー	3.86時間	1.83回	34499円
ミドルユーザー	5.25時間	2.10回	39232円
ハイユーザー	6.18時間	2.55回	35563円
レンタサイクル利用者	4.62時間	1.86回	37415円
その他サイクリスト	5.51時間	2.54回	33947円

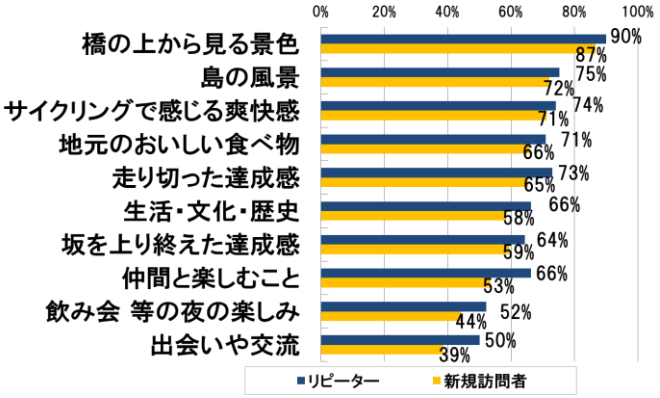

図 4 リピーター・新規訪問者別 魅力度

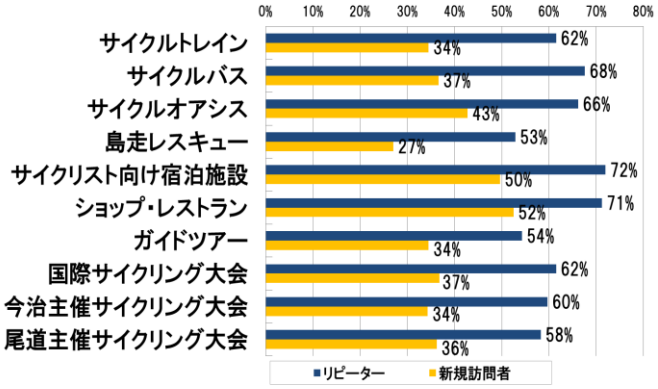

図 5 リピーター・新規訪問者別 認知度

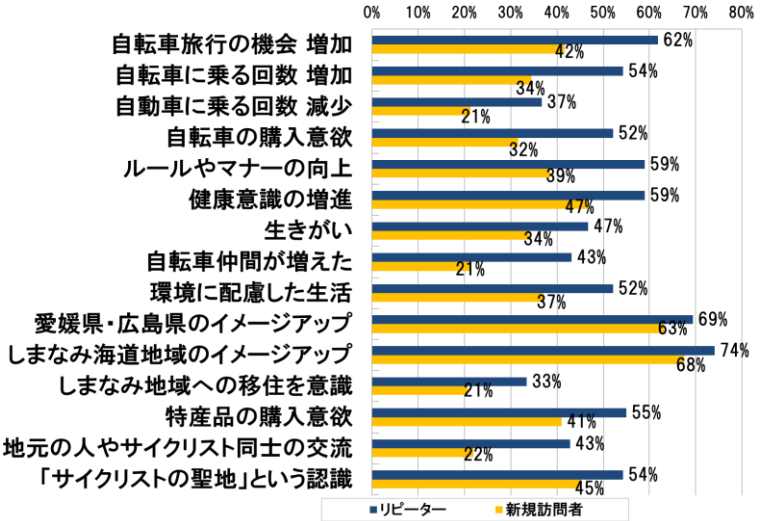

図 6 意識や行動の変化・効果

5. 自転車観光による社会的効果

サイクリストの感じる しまなみ海道の魅力（図 4)からは，しまなみ海道に特徴的な景観や達成感が魅力・価値になっており，さらにリピーターは仲間や出会いや交流を価値と感じる率が増えている．こうした機会を増やすことがリピートにつながる魅力向上と言える．

多様な観光促進の取り組みについての認知度を比較した図 5 でみると，リピーターは新規者よりも多様な取り組みを認知している．取り組みがリピーターからの支持に寄与していることが示唆できる．

さらに，図 6 のしまなみ海道でのサイクリング経験によって生じる社会的効果をみると，「自転車への関心が生まれ，乗車回数が増えた・生きがいとなった」，「地域のイメージが向上して消費行動が促進された」，「サイクリストの聖地という認識が広まっている」という変化が生じていることが確認でき，特にリピーターは新規者に比して，仲間が増えた，地元やサイクリストの交流といった効果が高くなっていることがわかる．健康・生きがいといった効果とともに，友愛や交流によって，リピーターの満足度が向上し，地域還元の効果が発現へつながるという期待が指摘できる．

6. 今後の課題

サイクリストの多様性を捉えた上で戦略的な取り組みを行うことの必要性が明らかになった．ヒアリング調査を通して，サイクリスト受け入れ環境整備の変遷や事業関係者の連携が見られたが，地元住民や多様な関係者の活動や役割をつなげることが必要と言える．さらには，サイクルツーリズムを推進している地域との比較へと拡大し，地域特性や魅力を活かした自転車観光のあり方を検討していきたい．

参考文献：1) 矢島拓弥，後藤春彦，山崎義人，遊佐敏彦：自転車利用者の観光地における行動実態－「回り道行動」に着目して－，日本建築学会計画学系論文集，Vol.76，No.670,2011.12